HITOKOMART No.14

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

天狗を描く

京都の出町柳から出ている叡山電鉄は日本で距離あたりの運賃が一番高いと言われているローカル路線だ。
私がマンガ学部の教員として１４年間通った京都精華大学もこの鞍馬線の沿線にあって、在職時は学生たちを連れて鞍馬温泉に行くことも何度かあったのだが、それまでは大阪人の私にとっては鞍馬山は全く縁のない、はるかかなたの遠い場所だった。
鞍馬駅には巨大な天狗の頭部のモニュメントが置かれていて、訪れる人たちにここが天狗の総本山と教えてくれるのだが調べてみると天狗の生息地はここだけでなく、日本各地にそれぞれの地名がついた天狗がたくさんいることがわかる。
天狗については諸説がある。手塚治虫先生の『火の鳥』黎明編にはそのモデルとされる猿田彦の話が出てくるし、日本に漂着した外国人説や九州の原住民説、古来より日本に生息する妖怪的な見方もあって興味は尽きない。
落語にも『天狗刺し』『天狗裁き』という有名な話があるが、いずれも実際に天狗が登場する訳ではなく、登場人物たち会話の中で扱われるだけである。
しかし団塊世代の私にとっては、天狗と言えば牛若丸に武芸を教えたという大天狗ではなく、嵐寛寿郎（アラカン）演じる鞍馬天狗が一番身近な存在だった。
幼稚園時代にはそのアラカンの絵をたくさん描いたのを覚えている。
まあ、これが天狗とは一番無関係な存在なんだけどね。

気分転換

観音様もたまには亡者たちではなくて純粋に魚釣りをしたいんじゃないの？と思ったものだ。
私の父方のお寺には、入るとすぐに蓮の浮かぶ池があり、大きな錦鯉が沢山泳いでいる。
実はこれがこの絵の起点となっていて、今年のお盆のお参りにはいつも以上にじっくりと観察をして来たのだった。

龍を描く

龍の登場する漫画はわんさとあるが、団塊世代にとっては故・石ノ森章太郎氏の『龍神沼』が一番に思い浮かぶ。

特に子供の頃に漫画家を夢見た人たちは、ほぼ全員がこの作品を読んでいる。それは昭和のロングセラーとなった石ノ森氏の『漫画家入門』の中に漫画表現の教材として使われているからだ。もともとそれは昭和３６年発売の雑誌『少女クラブ』の夏休み増刊号に発表されたものだが、圧倒的多数の人たちはそれよりも後年に出たこの本でそれを知ることになるのである。

龍は中国では皇帝の象徴として扱われているが、日本では水の精とか、運気上昇の意味合いを持って語られてきたから、龍を描いた絵は水の恵みや立身出世のお守りとして使われる事が多く、人々は雲を呼び、天に舞い上がる龍の姿にエネルギーを貰ってきたのである。
実は私の祖父は龍作、父は龍男という名前だった。
ともにそのエネルギーにあやかる想いがあったと想像するが、私の世代にはそれは引き継がれることは無かった。
もし龍の一字を引き継いでいたとしたらどうなっただろう。
龍ノ介、龍太郎、龍一、龍三郎……。
う～ん　イメージ違うなあ…。

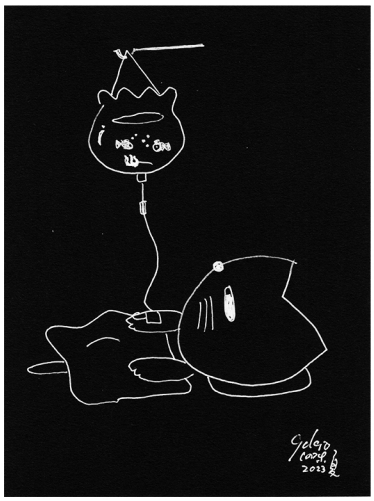
手みやげ

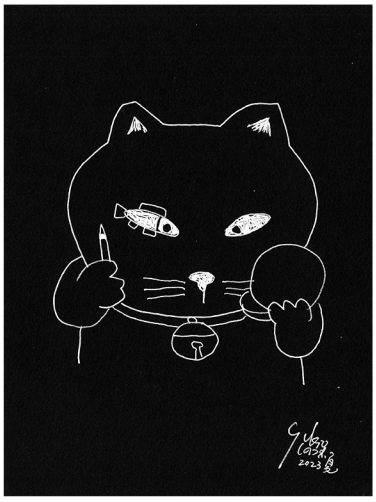
『ジャックと豆の木』は誰もが子供の頃に読んだ童話だが冷静な目で見ると他人の宝物を盗んだ挙句、取り返そうと追いかけてきた巨人を殺してしまうという何とも後味の悪い物語だという事に気が付く。
牛との交換で手に入れた種で巨大に育った豆の木を登った先に住んでいた巨人の屋敷に忍び込み、金貨や金の卵を生む鶏を盗む少年の話は、勝手に他人のパソコンに入り込み個人情報や財産を盗み取るネット犯罪のヤカラに重なって見える。
子供の頃は巨人を悪者として見ていたので、大木を切り倒されて巨人が落下死する場面に喝采をあげていた。
何の違和感を感じることは無かったのが不思議である。
これに限らず昔の童話やお伽話には残酷な描写や道徳的にいかがなものかと思う設定も多々あって、それらは時代とともに物語の組立てや結末が書き換えられている。
だから昔の感覚のままのおじいさんが「むかしむかし、ある所にナア…」と不用意に子供たちにお話を聞かせるのはとてもリスキーなことだと思ってしまう。

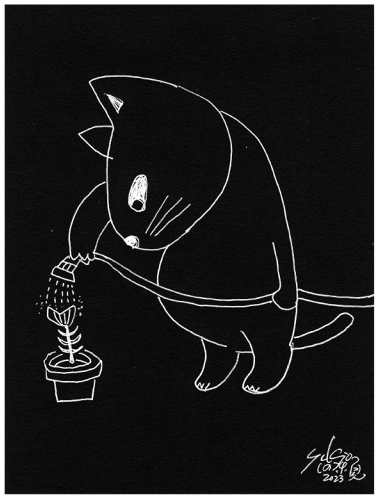
エアバッグ

エアバッグは今やほとんどの車に標準装備されているが、この手のモノが他にも転用できれば…と思う事がある。
足の感覚が微妙に違ってきているのだろう、足指を家の中の段差にぶつけることが増えた。先日などは右足の親指をイヤと言うほどぶっつけてしまい、その結果、爪が根元から剥がれる大事になった。
ひと月以上経つ今も爪は復活できていない。
自転車用の緩衝素材を縫い込んだサイクルパンツは持っているが、そんな靴下作ってもらうしかないかな。

猫マンガ❷



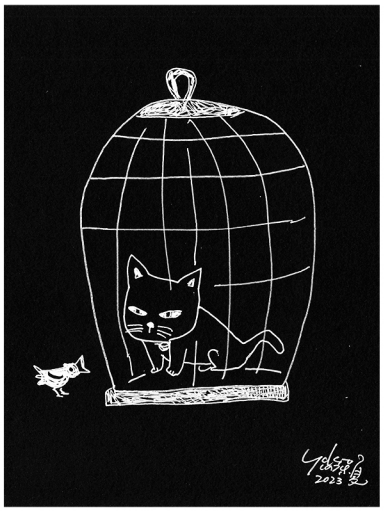
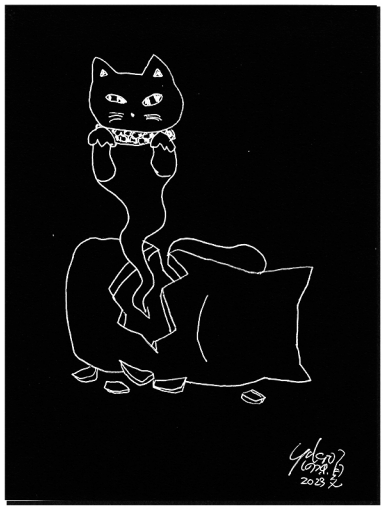
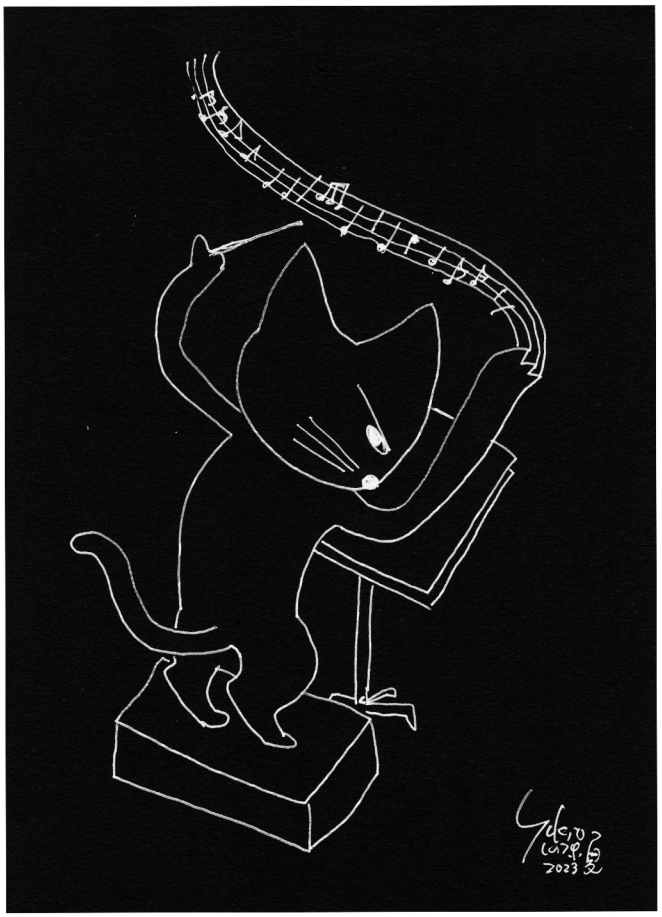
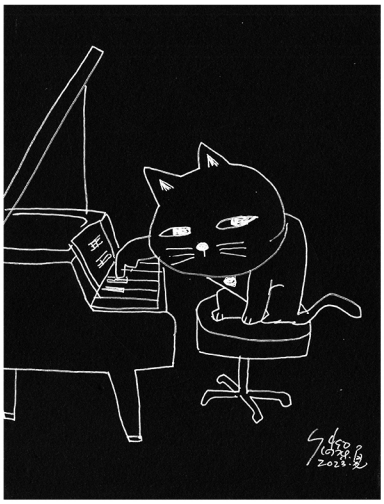
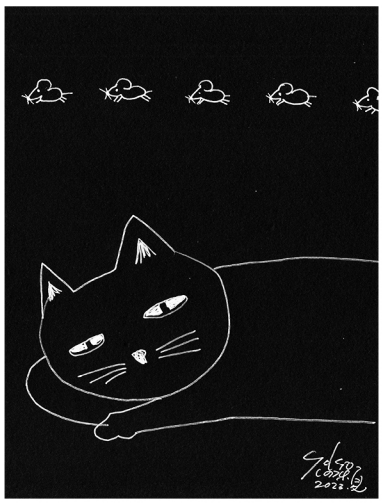




若い頃は猫の絵を描くことはほとんど無かった。絵を仕事にするようになっても進んで描くことは無かったと思う。反対に高校時代に同じ美術部員だった家内の方が愛猫の絵を大量にスケッチブックに描いていて、コイツ上手いナアと感心した記憶がある。

今も昔も猫の絵本や写真集は街にあふれていて、出せばそれなりに売れる定番商品である。
家内は生前、猫の絵本と写真集のコレクターだったので、今でも書架にはたくさんの本が残っている。だから猫に対する思いの深さは家内には到底及ばない。

猫を仕事で描くようになったのは18年ほど前に大阪の朝日新聞の夕刊で『肉球入魂』と題した犬と猫だけを主人公にした１コマ漫画の連載からだった。連載は２年半続き、総数120点ほどの犬・猫ヒトコマ漫画を描いた。

今回の猫のユーモアイラストはその流れとはちょっと視点をずらして、ゆるい感じのユーモアイラストとして今年の夏の個展に描き下ろしたものの一部である。全て下書きなしで白いペンで一気に描いた。

家内の描いた絵にはまだ及ばないが、最近やっと自分の猫の絵もなかなか味が出て来たナアと思うようになってきた。